

共古日録
巻拾二

特別
15
1413
34

市外中東大

市内中東大



門 15
 號 1413
 卷 34

早稲田大學
 昭和 25.10.24
 蔵 本

共古日録三十二



河原の
 左子角は焼芋を焼く
 川越生れは焼芋を焼く
 昔新志の焼芋を焼く
 後三三
 乙卯二月十日

二見の青蛙

川妻の色紙

利根川の
 川妻
 利根川の
 利根川の

とがせハ一為呼ハ能ラ不能臨由長ク動止自由なしと其
後三カ世帯武藝示人の及んばありあつて中
乃以流せんが計あり一色なる其が好むならん樂坊の面店
某と計りあり其を識り買んが身を一丈の可なりと其
とち始り一色ゆめをかこみ力の進進とてなるとありと
所を捕り見せしむ刑をせしむとあり
以東江の店(徳長)の主人又二十任者の必ぢり由(樂の目)あり
中、初一色婦の社を建しが其社利想のたつてあり
其社前を船路あつて川の西を後りて社を建
しちりしとて船路の流ちりしとていふ
の也子祀をあり一色婦をふりて學少無道の
の身を祀はしめり

江戸の歌

江戸市中の新道 意あ

根子歌は 如下所供ゆゑ前仲道り

樽歌は 福屋歌は 其股あり

福屋歌は 系坊の身町と北組を所との向ありて
前記の福屋歌あり別々古足歌は福屋
歌あり

大丸北組の妻通り

菊歌は 親世歌は

根子二丁目と弓町の間あり寛政年中

狩野歌は

京橋銘所南連り

江戸の歌は 南の歌あり

虎の前の墓と 越前と 美濃と 瑞の島

虎の前の墓

五本骨の神

三つにさういふ名の古跡大塚のみある面白し

五本骨の二角の神 越前 越前 越前 越前 越前

入高野の角の愛宕社 越前 越前 越前 越前 越前

止越前の神社にしろ 福田源三平にしろ 越前に居る作の

り甲おしに居る上はた木とてありてその神社の神職が

か所が四神神の角の神の神の神の神の神の神の神の神の

瑞田の角の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

さぬとありて同様の話の五本骨の最古の形なる殿の宝物中

古物と書に五本骨ありと七本骨八本骨等と云ふものなる

七本の事なるなり

入高野の神

大正五年十一月十日 武蔵野の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

其の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

下車より停車場の南西角に下りて武蔵野の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

に下りて神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

双葉の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

其の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

はれ高野の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

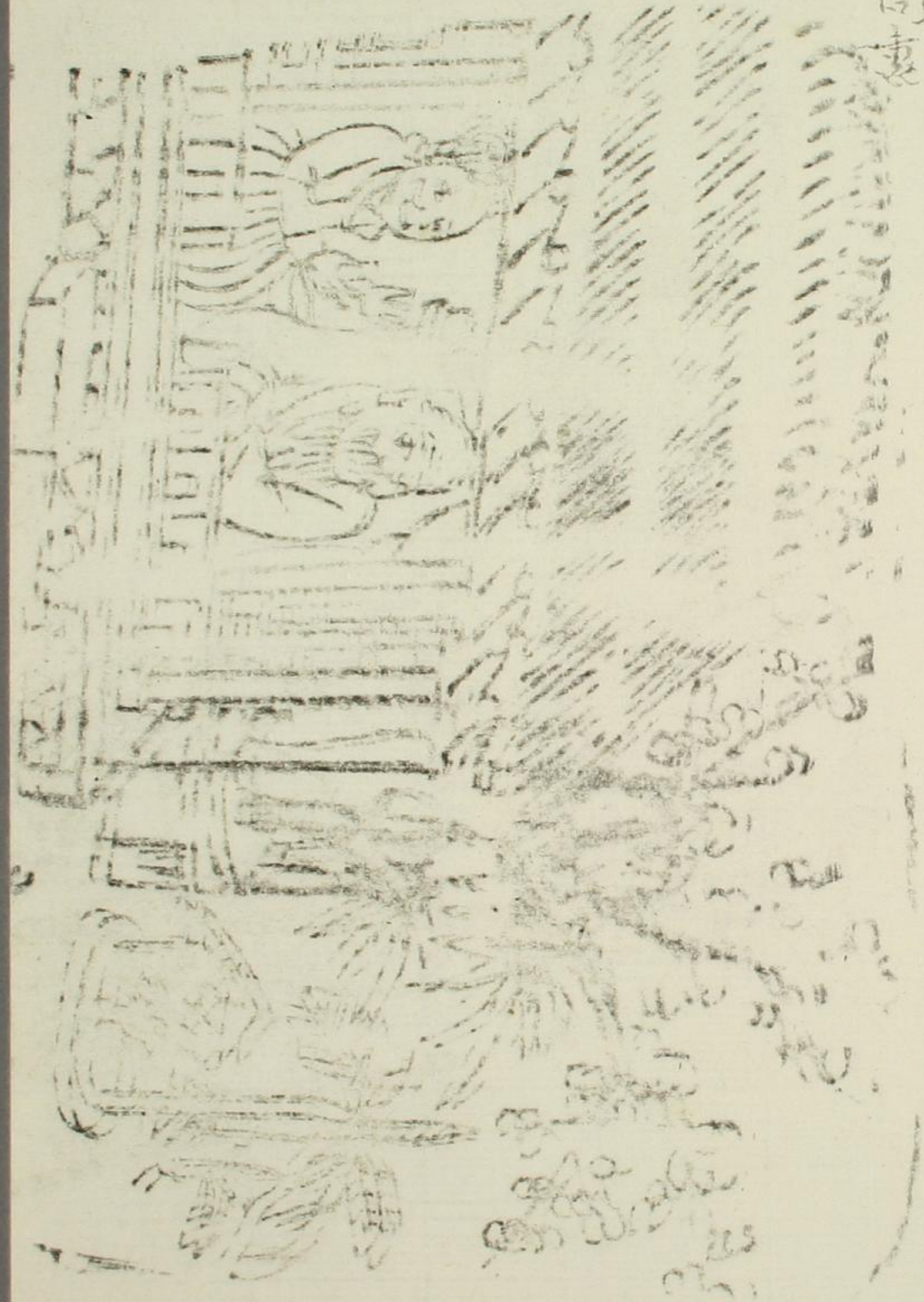
東長崎の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

あつた神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

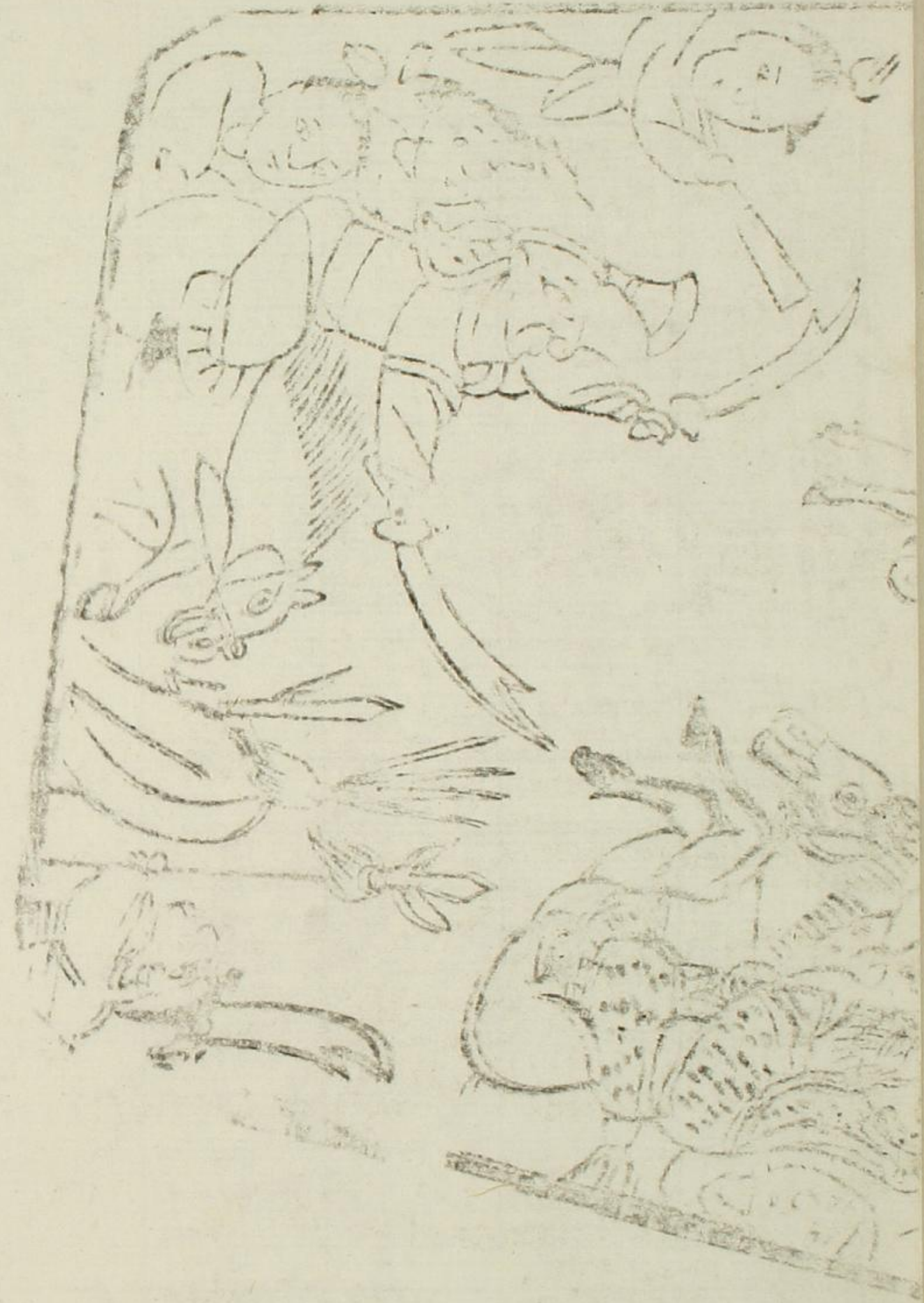
道に神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の

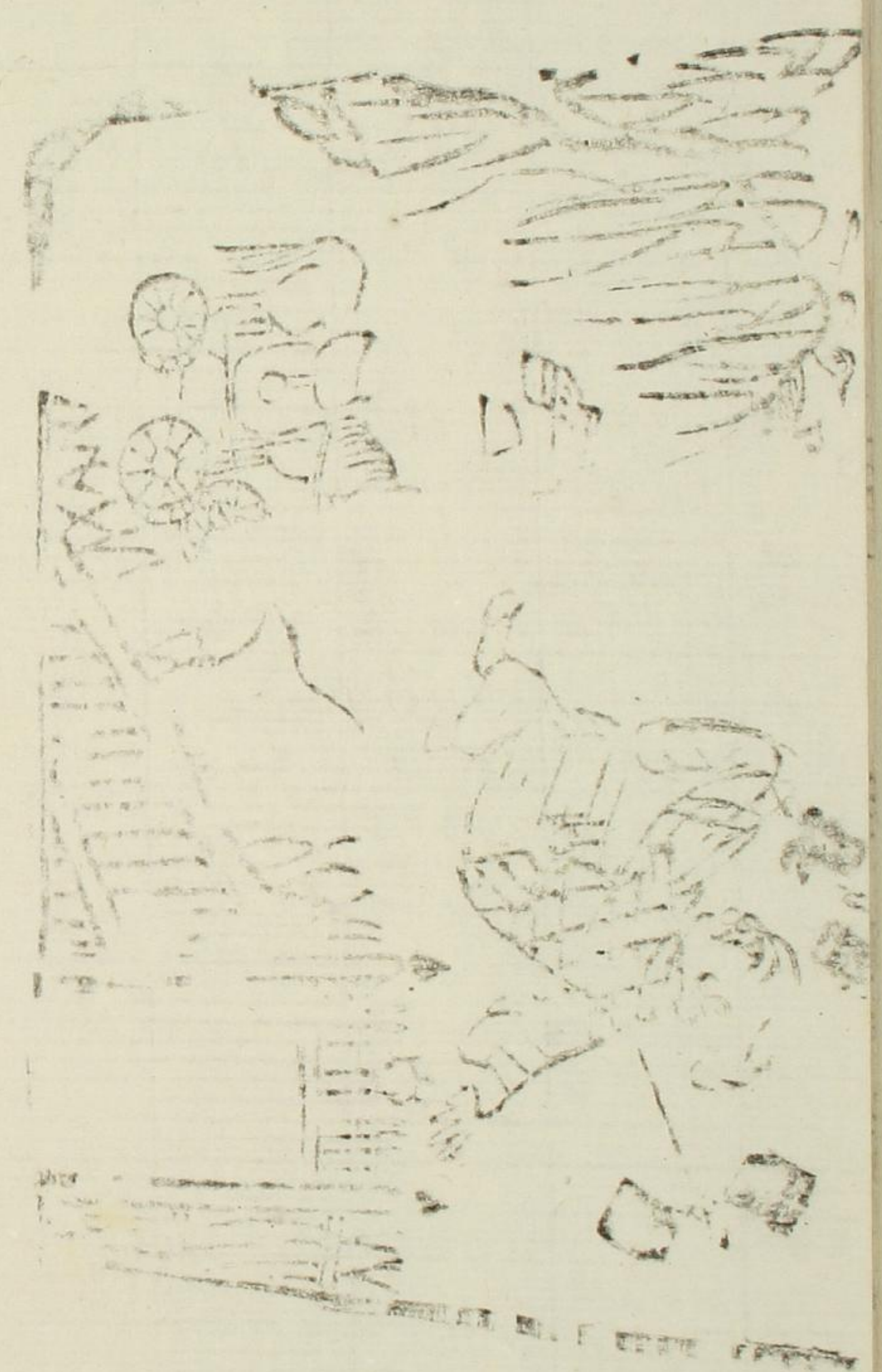
多しなり 武蔵野の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神の





同裏





元禄五年
向世の日記
抄

目録

大銀
向世の日記

好善寺に於て元禄十五年より二十二年向世の日記抄の
 始末ありとの中に正徳六年甲申中の事あり物川の事あり
 あり乃ち其の事あり
 かくやまの事あり
 かりとこゝろあり
 福眼大賣りと書るる道徳の地を張助の記と同一なる事あり
 正徳の既にあつた事あり
 同帳寶永五年子の記に
 壬子月廿七日原出京都より大銀を文う始むる由用は此
 而後銀三貫九百文を四貫と追費買はせり二月別所
 々連判の事あり
 同世の年の記に

大錢正

三月十八日大錢正の作付の成り回数及び引

大錢經實永二二卷

大錢停止

寶永通宝

永久世用

一錢十錢

通用不足

四百一兩

世間騒動

右京一問

伊賀同抄

福垣承記

以加成收

成海志

伊勢河原

加藤子連

本多煇金

新庄母屋

古金繁昌

後藤藤藏

銀座殿々

珍々々々

以上前記の日記中

故松浦武田守直大和守大守の申渡後通りなり

連に傳出し納りたり大守の申渡後通りなり

明治十三年五月大守申渡後通りなり

辣松浦武田守直河原(花押)

美和歌集

其代和歌集二十卷 丹波書には十冊あり

今部三冊の書文二十年三月申渡後通りなり

写後日校令畢歌集写本あり不審なる者あり

多し其の書文不明重なり心申可合校合あり

いづれにまじり明さん下紐のつけあり

其歌集代和歌集の書文あり

美和歌集の解題を記す

美和歌集の書文

美和歌集の書文あり

美和歌集の書文あり

美和歌集の書文あり

美和歌集の書文あり

評判記追加

古く桐伏なる私刑書行はけし
評判記評判記評判記

平安画評判記

中好意画評判記
これらも評判記の類なりとす

元禄七年の事知事
長考丸番貝也

古老乃言評判記
長考也とて代り

評判記追加

然るに後光厳院此の事か
下向の事
大阿毛と評判記
男形のあらん

三つ以上の菩提ありと云ふ五年の如き御首御終を御事あり
 三つ以上の菩提ありと云ふ三つ以上の菩提ありと云ふ御事あり
 し御終ありしと其の菩提ありと云ふ御事ありと云ふ御事あり
 ねとありと云ふ御事ありと云ふ御事ありと云ふ御事あり
 又保十二年六月廿八日再興の施主五十七歳女子祈禱坪内又
 又斤麻二〇〇
 天保三年六月廿八日再興 西の丸大妻老女八重山
 四天王三将神御男子大願成就
 とありと云ふ御事ありと云ふ御事ありと云ふ御事あり
 祈して老女を御事ありと云ふ御事ありと云ふ御事あり

外神田は唐

外神田に法大名のはま十一ヶ所ありしを現今のまをいふ

末廣町十八番地御寺東北角のはま 天保四年改修
 和泉通 現今通津會社の角
 河内通 前河内北の角
 三つ以上の菩提ありと云ふ御事ありと云ふ御事あり

三つ以上の菩提

河内町廿二番地
 五つ以上の菩提

十六

各町十九
 三つ以上の菩提

以上のはまは唐ありしなり
 以上のはまは唐ありしなり

永和の戦い

大正六年一月三日... 永和の戦い... 其銘

永和五年己未正月廿九日

藤福寺鎮守



三

最後の戦い

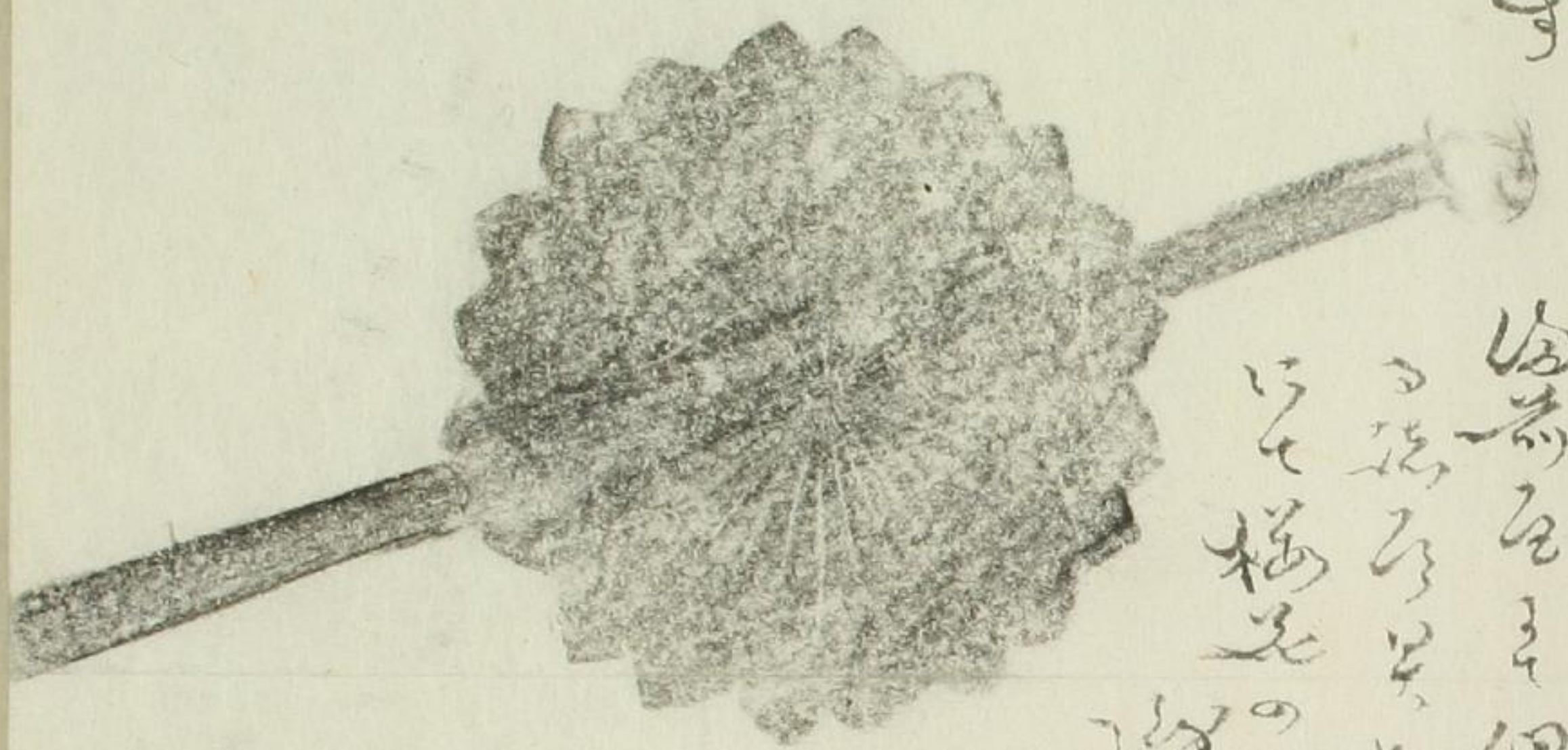
永和五年己未正月廿九日... 藤福寺鎮守... 永和五年己未正月廿九日... 永和五年己未正月廿九日...

伊勢の戦い

伊勢の戦い

伊勢の戦い

伊勢の戦い... 伊勢の戦い... 伊勢の戦い...



伊勢の戦い... 伊勢の戦い... 伊勢の戦い...

三村の戦い

相河村の二の位よりお寺の敷地あり然るにいふや
越後の弘智寺には妙法蓮華の人の名とて
其の寺境の麓に身代世長とある所縁をその寺
とよむの故年の早よの論や相河の石姓の教を
とよむてその身に麻衣く妙法蓮華の世長といふ
ありしとて

里谷川中よりわらばとてそのありては
寺のありしとて妙法蓮華の教をその寺
とよむの故年の早よの論や相河の石姓の教を
とよむてその身に麻衣く妙法蓮華の世長といふ
ありしとて

大平山の鐘は相河の鐘なり其の改嘉加元の年西平
の鐘とあり重臣千秋汎河勿誤
國泰子也
十三の鐘は瀧の中にある其の改嘉加元の年西平
の鐘とあり重臣千秋汎河勿誤
國泰子也
今の本河の辰時鐘は遠近江の鐘なり是味輕時鐘
の鐘なり其の改嘉加元の年西平の鐘とあり重臣
千秋汎河勿誤
國泰子也

深少大指況は猿も色もあつて延暦年中の御鷹を獲せし時
里谷越等もその時御鷹を獲りて食ふも
一種のつゝり物社境に生る哉の料理と云ふ又猿もその
一哉ありとも荒蕨と名する不能と云ふ此は所傳体荒
蕨と云ふし然るもつゝり

大平山黒川の傍に成は妖を数多く見ゆと云ふこと
津輕にも食料に用ひりらばと云ふ草也まことに食せぬこと
多し河原に思ふ毒草と云ふ

此言は津輕に下草のものとして多人は食せし津輕に
萱草牡丹の葉を食せぬことおぼしむる

東渡新田老は火指あり大平山に三寸草と云ふ水もあつたり
の下草の草の中地もすこすこして強くと云ふ

新田の色の彫る館の梅の樹也此のま下けてあり里人
古人梅の鞭を道に置きしもの草也此のま下けてあり
寛政二年四月某の堂を某の町南に修むるに梅はこれ
佛の徳に似て早梅田南に乾して穀已に枯れんとす
此は古の梅ありて何れももろく田南にうゑり早梅不思
御の鳥を所梅をりおしと云ふに行基妙巧の某師の所傳
なり西遊書に梅の如しと云ふ早田の某師と云ふ
千年山乃坊二高計り某師の如く土城にしてその鼻は大なるあり
あり海もなるあり俗に某師の如く云ふ
去る年の心置りて深浦街に子嚙と云ふと云ふ今の街道は昔の
海中なりと云ふ
田沢村椿崎之玉の如く縁結の如くと云ふ

此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり

津輕吉田の寺にありて日笠山とあり

天和三年日笠の寺にありて日笠山とあり
天和三年日笠の寺にありて日笠山とあり
天和三年日笠の寺にありて日笠山とあり
天和三年日笠の寺にありて日笠山とあり
天和三年日笠の寺にありて日笠山とあり

教寺の寺にありて日笠山とあり

此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり

里塔後為今別色の中より花を多く咲かせるが所なり
里塔後為今別色の中より花を多く咲かせるが所なり
里塔後為今別色の中より花を多く咲かせるが所なり
里塔後為今別色の中より花を多く咲かせるが所なり
里塔後為今別色の中より花を多く咲かせるが所なり

此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり
此山は一二丁が向傍りて花を多く咲かせるが所なり

死者昔年の天與の年なるのに廿年より自殺せんが城の廿年七
 福を乞つて昔年と信せり故に其の昔を葬りて出ぬ杭を
 死体よりぬき出ても好まざるありしと英國より其の俗あり
 しに二十八年廿四年法律を以て禁せられたる猶行ふ者ありしに
 十一年の二十二年毎度法律を以て禁せりしを以て
 死体の杭を杭せざるを以て禁せりしを以て又杭を
 出さずることをす
 疫病その地の流りあるに村の間に地を塚の
 回を築き
 又早はつたる起りぬ村に或は疫病を病する者ありし
 死体を埋しざるに好し死体を川に流し置る者ありし
 其の死体は川の水を汚ることをすわくをせしが其の想を知
 と信せり也地母と稱し生心をあつと信ず

石敢當

石敢當

史記急就
 石敢當 魏師古注當言所當無敵也
 王應麟補注孟子曰彼患敢當我也
 王象之輿地碑目 錢大昕恒言錄大引

考云唐大歷
 以下叙錢大昕
 文亦不

慶歷中張繹率莆田一石銘其文曰石敢當鎮百鬼厭
 災殃官吏福百姓康風教盛禮樂張唐大歷五年繹
 令鄭坤字記今人家用牌石書石敢當三字鎮於門
 亦此風也

○考云慶歷北宋仁宗年子王象之輿地碑目考云
 見之書案四庫全書總目八十六目錄魏校宋王象之
 輿地碑記目卷

陶九成輟耕錄十七 石敢當

今人家正門適當巷陌橋道之衝則立一小石將軍或植一小石碑鑄其上曰石敢當以厭禳之崇西漢史游急就章云云據所說則世之用此亦欲以為辟障之意楊升菴全集四十三卷鐘道

石敢當本急就章中虛擬人名本無其人世俗互石於門書泰山石敢當文人作石敢當傳虛語戲說也吐若相傳久之便真有其人矣

姓源珠璣

明徐勣筆精六引

考云此世世漢本記諺事下宜補左方 州智遠遺力士石敢當袖鐵鎗侍晉祖與燕帝出奔遇于衛
智遠擁高祖入室 智遠擁入石敢當拾劍死 智遠盡殺帝左右因號傳國璽

考云石敢當生平逢凶化吉以下或徐氏之而非珠璣之亦不可知也記以從閱其書

石敢當生平逢凶化吉御不侮訪危後人故凡橋路衝要處必以石刻其形書其姓字以捍及居或贈以詩曰甲冑當年一武臣鎮安天下護君民捍衝道沿三久口埋沒泥塗百戰身銅柱承瑤瑤間紫塞玉京守禦老紅塵英雄未往休相向見畫英雄未往人

○孝有說見下

萬姓統譜

入戶錄弱五代

石敢當

劉知遠為晉祖押衙路王從珂反唐懿帝出奔遇於衛州知遠遣力士石敢當袖鐵鎗侍晉祖與燕帝議事知遠擁入石敢當格鬪死知遠盡殺懿帝左右因號傳國璽獨留帝棄傳而已

考多劉知遠力士石敢也。非石敢當也。萬姓統譜姓
明楊信之姓源珠璣本有此誤也。姓源珠璣者未見
之書。然知統譜之姓源珠璣者徐文舉精引姓源珠
璣其文全同。故知之。但徐引敢下並有當字。元唐
字元獨留以下七字。四庫全書然。目類書友日收
姓源珠璣六卷。未知傳播於本邦乎否。又考姓源
珠璣載石敢也。非石敢當也。而徐文舉精引石敢
當之條引姓源珠璣作石敢當者。蓋徐之本意
欲記石敢當故事。上文既載史記。故急就及類。而古
註考而引珠璣則遠讀珠璣所載石敢而誤混
為石敢當。遂行當字。亦不知可知也。萬姓統譜
則直就珠璣而錄出。故作石敢非脫文也。但標

目作石敢當者。當時人口膾炙有石敢當因誤然
行當字二說。讀者宜辨其意之所在也。

群碎錄

明陳繼儒著

石敢當五代漢劉知遠時勇士。謂其勇無人能當耳。

徐文舉精卷六

○考之引系就事
未引姓源珠璣今考

○以上四種。明人所著之書。混載石敢與石敢當

考云李唐以後石敢當三字鑄之。小石以為威。禳朱明
之神。以虛擬人名之。石敢當混於五代力士之石敢
今臚列諸書。辨其謬誤。

蘇達吉漢

高祖實錄

通鑑卷二百七十九後唐紀八考異引○考云宋文

蘇達吉漢人五代史漢臣有本傳

是夜偵知少帝從甲欲與從臣謀害晉高祖詠屏人對

高祖 晉高祖謂石敢壇也
 知遠 漢高祖
 廢帝 明宗卷以爲子太后降廢帝爲鄂王廢帝即位詳見唐本紀七六稿

謂方坐度廢帝哀遠御史石敢神鏡立於後俄頃伏
 甲者起敢有方力擁晉祖一室以巨木塞門敢力當其鋒死
 之帝解佩刀過庭臨以死此葺炬未燃者驚擊之衆謂
 短兵也遂散走帝乃匿身長垣下聞帝親將木其信
 謂人曰石大尉死矣帝隔垣呼其信曰大尉無恙乃瑜垣
 出就其信兵共護晉祖殺建謀者以少王授王弘執
 其 史第十漢本紀第十 高祖劉文初名知遠
 路王從珂反慈帝出奔高祖自鎮州朝京師遇慈帝
 於衛州止傳舍知遠遣勇士石敢袖鐵槍倚高祖以虞
 愛高祖與路帝後事未決左右敢兵之知遠擁高祖入
 聖敢與左右格劍而死知遠即率兵盡殺慈帝左右
 留帝傳舍而高廢帝入立高祖復

繼古叢編

韻府下平陽韻當字

史游急就章云石敢當余因吳氏廬舍街衢直衝必設石
 人禽獸禳之寺亦有本也
 好古日錄 第九條

石敢當 肥後國 郡及邑 三立所石敢當其字大
 尺余其書高古如木布一アリ何一人何一年三立シヤ
 松屋叢話卷二 石敢當

集古十種研銘部六の卷に肥後國石敢當高サ三又八寸
 四分幅一又三寸五分云云橋南齋の面指記一の卷に薩州
 鹿方嶋城下所々の行當り或ハ此街を以テ高サ三又
 計なる石敢當の石敢當と云云又高サ三又八寸
 廣而シテ幅隨筆五の卷に引ク如形高サ三又八寸
 勇敢部に及之たりと云云此外に五代史輯耕錄宿文筆精好古錄

是の意就章のこぢれは是れは

考云ふも慶應三年三月四日頃
石敢當の碑をたてたり
初夢のこぢれは是れは
そのこぢれは是れは
先りしは故事をいふ
かの好古り流の友人伊佐父の指南より書きたり
石敢當の碑をたてたり
又書きたり
かもしなかりしは是れは
幸ひなりしは是れは
石敢當の碑をたてたり

況齋

松屋叢話ニ屋代弘賢ノ説ヲ上層ニ書加ヘラレタリ其文ニ
漢淮陽高塘柳元叔カ母ノ殉ニ石ヲ以テ石敢當ノ三字ヲ
刺セシ事元叔遺言シテ母ノ例ニ葬ラシメ妻之為石敢當
ト云事益部著舊傳ニ見ユタレハ漢ヨリ在ニ事明ケシ
トアリ考云此ニイヘル事イサカ急ツラヌカヌヤウレハ
誤脱アルニヤリレハトモカクマレ益部著舊傳ニ石敢當
ノ事アリトハミラルサテ此書ハ晉陳壽ノ撰撰ニテ隋書經
籍志ニ益部著舊傳十四卷長考續益部四傳二卷
トアリ 旧唐書經籍志唐書藝文志ニ詳シサマニ
今ハ此書佚シタリ
タ、説部ト五朝小説トニ聊ハカリ載タリ七友伝田父古書
ノ佚脱ニタラズ嘆キテ佚脱ノ古書ノ中ヨリ凡二千種程集

本アリ古伏観斑ト名ツケテ若子冊アリ方ノレ架中ニアレハ
繡宛スルニ益部著四傳ノ條ニ正續トモニ此支ヤシ屋代氏何
書ヨリ引登セラレタルカ説部ニモヤシ但世朝小説ハイマタ
檢閲セズ博識ニ問フニシ

況齋又誌

廿二勲

屋代本邦の
秘高設格

秘園梅の
未を園

古川柳一ツリで廿二勲の外々愛いこれの昔の事
一ツリニ金猫銀猫と称せりハ娼婦ありしと云ふが廿二勲
と釋尊涅槃の時ニ廿二勲の動物ありて悲しに猫の尻尾
を引しとの説より云々のなりと云々何の經典ニ廿二勲とあるか
わらわが正しをりてゆゑと云

武家略系と題せる武鑑
百五拾巻 御勅を格 屋代本邦 中河内中下

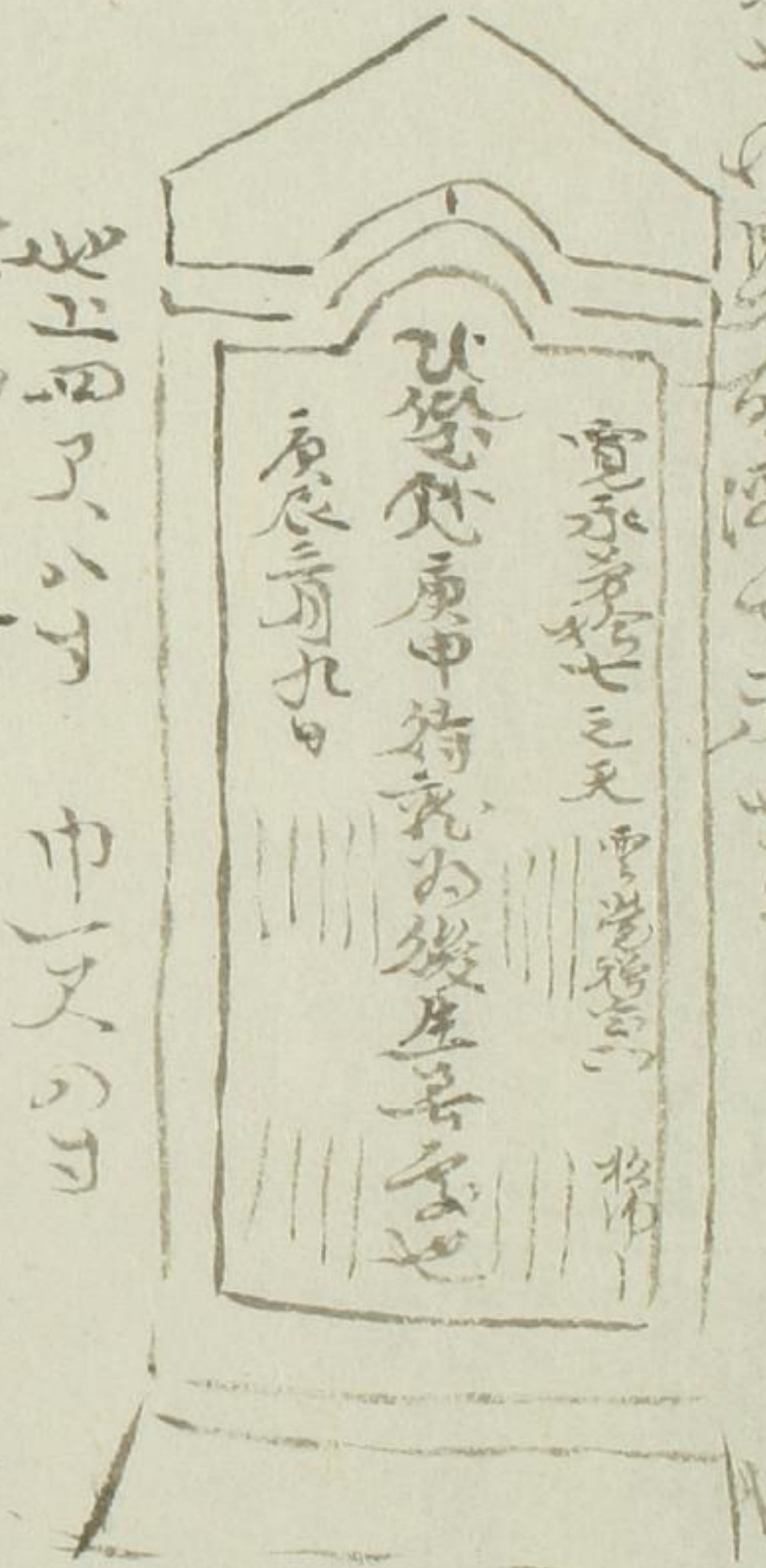
園ニ秘園あり秘園梅の根廻り一丈二尺上まで一丈ありと云
秘園中ニある未を園の者見たりと云々通念由縁寺内十六
井戸若葉ありあるなりと云々此全即
廿二勲也ニ秘園の事ありや不也

海老原の歌
由江流の歌
の歌

寛永の庚申

寛永の庚申
本郷の宮
三村に宮をたてし見ゆ河をさして

寛永の庚申
寛永の庚申
寛永の庚申
寛永の庚申



明治年細記

神田の宮
一好むの歌
年の一好む
早

明治年細記
東京
業茶園持

明治の歌
元皇の歌
二二二
二二二
二二二
二二二
二二二

洋名

和名傳信機

和名傳信機
和名傳信機
和名傳信機

“ 新編の原の五階造りの家出来”
 “ 所人馬車にのり大名土手へてまらち”
 “ 流るる水車からて米つる足のかき”
 “ 流るる下流なまのけしき”
 “ 所々に帯を焼きて海を渡る”
 “ 新編の詩を吟し大鼓持漢語を”
 “ 伝承の明也又箱のせとせらち”
 “ といひもあをひらげて合羽”
 “ 角力せりまらち”
 “ ひとりの車おこるる”
 “ 武家世のなとて下女買物”
 “ 茶碗をいぢん院のぬか”

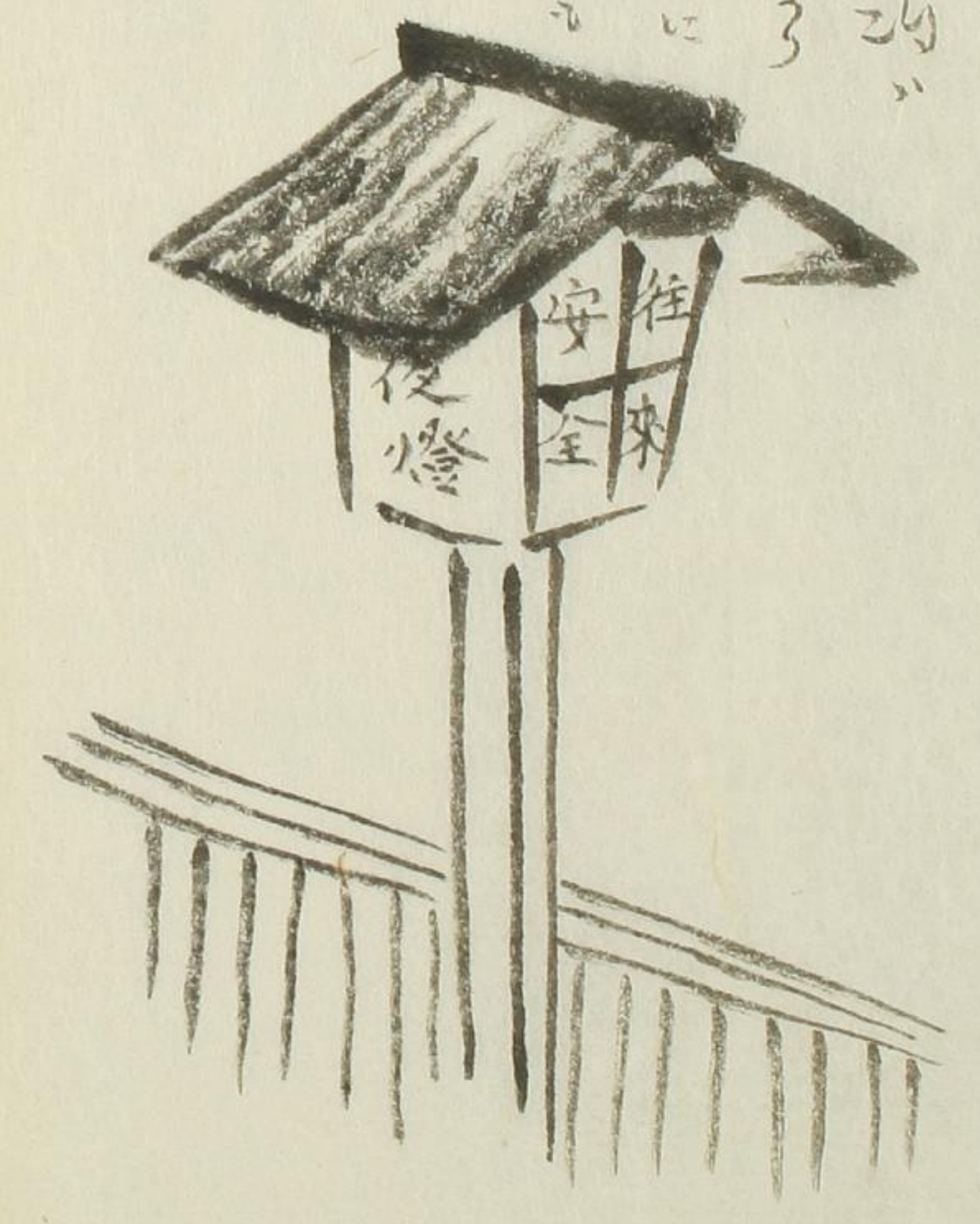
“ 横濱昔の物語”
 “ 英吉利の船の類のいく”
 “ せんがらちと三女の”
 “ 金さうちと”
 “ 高社と三多”
 “ 新編の中堂”
 “ 八幡の”
 “ 路外明也の”
 “ 大”
 “ 刀鉞の”
 “ 牛”
 “ 初さの神”

〓 檜の馬場を遊ばせし高田の馬場畑を
 〓 吉原の角田久しづり本しよふ
 〓 三十三河堂板敷のあり敷てら
 〓 東馬の場末に敷せよこの最
 〓 三月より四月の世にわたるこの場敷を
 〓 三月もあつた大に板敷
 〓 引あつた舟にぶらこしとて遊ばせよ
 〓 どりこいの次矢鱈の火
 〓 板敷の場敷の火中ま時を山
 〓 同日出し世本あつたあつたこの人数
 〓 同日東馬の敷の火中ま時を山
 〓 同日東馬の敷の火中ま時を山

〓 多人数の敷のあり板敷の火中ま時を山
 〓 神田の火中ま時を山
 〓 同日あつたのあり板敷の火中ま時を山
 〓 新馬場の敷のあり板敷の火中ま時を山
 〓 諸人の敷のあり板敷の火中ま時を山
 〓 蒸気車敷のあり板敷の火中ま時を山
 〓 あり一蝶の敷のあり板敷の火中ま時を山
 〓 芝居の敷のあり板敷の火中ま時を山
 〓 先年より芝居の敷のあり板敷の火中ま時を山
 〓 板敷の敷のあり板敷の火中ま時を山
 〓 板敷の敷のあり板敷の火中ま時を山

同の神田のちのちのち
 一にけに思ひて葉の葉を食ひ
 一にけに思ひて葉の葉を食ひ
 以上二編

此下...
 前日...
 角力...
 行司...
 あれ...
 一...



一...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...

三島田舎の... 遊年の... 文の... 取文... 年...

為御慰

兎理... 地獄...

大将... 時元...

左... 右...

木 た の 二 三
 縁... 鉢... 中... 海... 菜... 馬... 小... 大... 年...

根株

善のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ
根株のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ

谷千

根株のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ
根株のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ
根株のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ
根株のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ

長

善のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ
善のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ
善のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ
善のこぼれぬの殺つて去るのこぼれぬ

ま

前園の如きものありあやも 麴のさつてくもさし
金もあけく首より上のまき 如く世の中をさし
思ふ也年暮りの行りれば 夜半のこもくもさし
三平
三年の暮りにして一とありあやもさし
高年の暮りにして一とありあやもさし
三年の暮りにして一とありあやもさし

あ

あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし

あ

あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし

あ

あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし

あ

あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし

あ

あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし

あ

あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし

あ

あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし

あ

あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし
あやもさし 麴のさつてくもさし

貴

海

天

水

七

十年以來... 貴

方... 海

所... 天

絶... 水

又... 七

あ... 七

七... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

あ... 七

七

七

七

七

七

平家

文比の東に... 行末の感

平家

平家... 行末

平家

平家... 行末

平家

平家... 行末

平家

平家... 行末

平家

平家... 行末

平家

平家... 行末

平家

平家... 行末

平家

平家... 行末

平家

平家... 行末

ついにやうやくの 百應より習せられたる燈道用とすべし
其の書物に 燈白の字あり 書の名もさうしういぬ
よしの末に 燈の字あり 高麗堂とあり 燈の字あり
此らゆりゆりいぬ
よしの末に 燈の字あり 高麗堂とあり 燈の字あり
万年青なるも 燈の字あり
及もなるも 千由言 奴 燈の字あり 燈の字あり
吉のむらりも 燈の字あり 燈の字あり
書物に 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり

燈の元は 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり
今も 燈の字あり 燈の字あり

以上何人の書物にシカ著者ト書名モヤシ三回世送り
全文に写し置たくトス 大正五年秋
共古記

共古日錄三十二



Handwritten text in Urdu script, including a large signature and several lines of text, possibly an address or a message. The text is written in black ink on aged, yellowish paper.



Vertical handwritten text on the left edge of the paper.

Vertical handwritten text on the left edge of the paper.

Vertical handwritten text on the left edge of the paper.